

張憲生『岡熊臣 転換期を生きた郷村知識人』(三元社、2002年5月)

桂島 宣弘

本書は、中国広州外国語学院大学大学院の修士課程を修了してのち来日し、研鑽を重ねてきた気鋭の思想史研究者の学位論文である。岡熊臣は、十八世紀後期から十九世紀半ばまで活躍した津和野の国学者・神職である。どちらかという土地味で篤実な学者で、これまで大きく取り上げられることは少なかった。地味で篤実ということは、純学問的な業績が多く、しかも未だに公刊されていない著作もあるということも意味する。本書は、この国学者に正面から向き合い、その思想形成過程を追跡し、その思想の特質をかなりの程度明らかにした労作である。

いうまでもなく、この時期の国学者の思想は、日本におけるナショナリズム形成の問題を扱う上できわめて重要である。そして、その観点からの研究はこれまでも数多く存在してきた。だが、それはどうしても本居宣長や平田篤胤を中心としたものになりやすく、他の国学者は宣長・篤胤との距離で評価されることになりがちであった。本書の特質は、まずそうした方法が意識的に避けられ、徹頭徹尾、津和野の郷村知識人の視線でその思想を捉えきった点に存在する。その結果、淡々とした叙述ながらも、京都や江戸から遠く離れた郷村におけるナショナリズム形成という問題に、われわれは誘われることになる。のみならず、本書は近代以降の学術的言説が、国学者の思想をいかに歪めつづけてきたのかという問題に対してもきわめて自覚的である。著者自身の印象的な発言をここでは引いておこう。「近代日本に関する物語が形成されつつある雰囲気の中で、半世紀も埋もれていた彼は歴史の中から甦らされて近代日本に関する物語というコンテクストと結び付けられ意味づけられていったのである。」

本書は大きくは二つの史料群から熊臣の思想にアプローチしている。一つは熊臣の主著の一つ『兵制新書』である。稿本の一部が失われていることもあって、これまで正面から取り扱われることの少なかった『兵制新書』は、その題目が示すように内外危機下での兵制＝軍制を論じたものである。だが、著者はこの史料から熊臣の社会観や時勢観をも抽出し、見事にそれを熊臣の思想構造全体に位置づけている。熊臣の封建制復古論、農本主義的社会観などと並んで興味深かったのは、郷村国学者において、儒学あるいは中国の兵学との格闘が、相当に深刻なものであったということである。普遍思想としてあった儒学・兵学とのジレンマを引きずりつつ知識形成をはかる熊臣の姿からみえるのは、ややもすると宣長・篤胤中心的国学者像が隠蔽しがちな日本ナショナリズムと中国・アジアとのジレンマそのものである。

もう一つ本書が中心的に扱っているのは、『読淫祀考』『読淫祀論』である。ここでは周縁部に追いやられた下級神職としての熊臣に視点が据えられている。排仏論が、儒者や国学者の論理的帰結として提示されたものであるとしても、神仏混淆の吉田家配下の神職たる熊臣としては、ここでもジレンマを抱え込むことになる。儒者はもとより地域と関わらない国学者が、吉田家をも攻撃する排仏論を唱えることに対して、熊臣は下級神職を防衛する立場から異論を提示することになる。ここで著者がいわんとしていることも、やはり宣長・篤胤中心の国学者像では、このジレンマが捉えられないということであろう。

実をいうと、著者のいう「下からの視点」からする国学研究は、いわゆる「草莽の国学」研究として伊東多三郎以来の蓄積が存在する。読みようによっては、本書もその流れのなかに位置づけられる。だが、それらと異なるのは、本書には日本ナショナリズムの郷村的形成に対する冷めた眼が存在していることであろう。やはり「近代の物語」である「草莽の国学」に対する過度の思い入れからは、本書は全く自由である。そして、このことが新鮮に感じられたこと自体が、これまでの国学研究を批判しようとする本書の意図が半ば達成されていることを物語っている。

最後に、本書の問題点を二点ほど提示しておきたい。一つは、やはり熊臣のもう一つの主著『日本書紀私伝』にほとんど言及されていないこと。『日本書紀私伝』は未だ公刊されていないものとはいえ、本書が文献考証的にも優れたものであるだけに、この点は気にかかった。第二に、熊臣が郷村知識人であるとはいっても、明治維新期の神祇行政に絶大な影響力を誇った津和野藩の国学者であったことが本書ではあまり重視されていないこと。熊臣につづく大国隆正の思想との関連など、津和野国学という視点も必要ではなかったか。もっとも以上については、著者自身も自覚しているところで、全くの蛇足に過ぎない。また、本書は関連する諸業績についても実に丹念に渉獵していて、熊臣のみならず国学や近年の思想史研究全般にわたる諸問題も概観できるようになっていることも付言しておきたい。

(立命館大学文学部教授)